

く潜伏約 5msec の表層陽性波が著しい。これは表面から 500 μ 附近以下で陰性となる。

4) 頭頂葉の応答は、表層陽性で、500 μ 附近で陰性に逆転する電位変化を示す。

5) 上記の結果は、霊長類より下等な動物の場合（ネコ、ウサギ等）と、その小脳刺激による応答の脳皮質分布では一致するが、応答の皮質内層の電位において著しく異っていることは注目に値する。その機能的意味を追求するため視床核刺激を同時に行なったが、多くの実験例が必要なため、目下研究続行中である。

蛍光法によるサルの中樞モノアミン作動性神経路分布図の作製¹⁾

田中千賀子（京大・医）

藤田 雄三（同上）

島田 祥三（同上）

中樞モノアミン作動性神経路の蛍光組織化学的研究はラット、その他の哺乳動物で報告されているが、霊長類に関する研究はまだ報告をみない。われわれは高次精神・神経機能研究におけるサルの重要性を考え、サルの脳モノアミン作動性神経路を同定するために本研究を計画した。脳定位手術により、神経路破壊を行ない、蛍光組織化学的にモノアミン含有神経細胞の分布とその線維連絡を調べた。

アカゲザル 4 頭に脳定位手術を行ない、特定の神経核、神経路を電気凝固により破壊、切断した。さらに薬物処置により、脳アミン量を特異的に増減させる方法を併用した。以上の処置をしたサルについて、脳の連続切片を作成し、蛍光組織化学的にモノアミン神経路の分布を調べ、さらに、モノアミン及び関連酵素の神経化学的分布をも調べた。

その結果、ノルアドレナリン (NA) 性神経、中樞 NA 性神経細胞の分布は橋被蓋の青斑核、青斑核下に大部分が集中し、その他、延髄網様体の腹外側にも神経細胞がある。青斑核から上行性 NA 性背側路、延髄網様体および青斑核から上行性 NA 性腹側路を形成していることがわかった。また、ドパミン (DA) 性神経細胞体は黒質 pars compacta、中脳網様体および脚間核をとりまく腹側被蓋に集中している。黒質の pars compacta からは線状体に線維を送って、黒質一線条体路を形成していること、腹側被蓋からは辺縁系へ線維を送っているらしいことがわかったが、この点に関しては、さらに破壊実験が必要である。

以上の結果から、モノアミン細胞の分布は、基本的に

は哺乳動物に共通のパターンを示すが、詳細に観察すると、NA 細胞の分布はラット、ジャワザルのそれに似ており、ネコ、イヌの分布とは異なる。NA 性線維束の走行は動物間にかかなりの差が存在することが明らかにされた。

視覚性短期記憶の神経機構²⁾

岩井 栄一（都神経科学総合研）

以前の実験で、猿の側頭葉のうち下部側頭回は視覚性弁別学習神経機構に極めて重要な役割を果たしているという知見を得ている。反面、この領域が視覚性記憶の神経機構にも関与しているかについては解明されていない。本実験の目的は短期記憶テスト課題と一般的に考えられている遅延標本照合学習に対する側頭葉視覚学習関連領域の部分切除効果を検討し、併せて、短期記憶神経機構の関連領域を解明することであった。

最近の実験で、下部側頭回前半部切除猿は遅延色彩標本照合学習の顕著な保持能障害を示すが、後半部切除猿は殆ど障害を示さないという結果を得た。この際、前半部切除猿は標本照合課題における遅延条件の有無、さらには遅延時間条件に関係なく、一様に顕著な障害を示した。したがって、上記実験結果からは下部側頭回前半部切除猿が示した遅延標本照合学習の保持能障害は短期記憶機構の障害に基づくものと単純には結論し得ない。この問題を検討するため、今回の実験では、標本刺激の呈示と、テスト刺激の呈示との時間的遅延条件の異なる（同時呈示、0 秒遅延、5 秒遅延、10 秒遅延の 4 条件）4 課題について、側頭葉部分切除猿の再学習の可能性とその再学習に要する試行回数の差異を検討した。

方 法

方法は「遅延色合わせ課題における下部側頭回の部分破壊の影響」（井深・久保田・岩井：日本心理学会発表論文集、1973 年）に記載したものと、再学習させる手続き以外は、まったく同じである。

結 果

下部側頭回後半部切除猿のみならず、前半部切除猿も 4 課題のいずれについても、長期間の再訓練後、再学習し得た。再学習するまでにおこなった試行の誤数に基づく群平均節約率は、同時呈示課題、0 秒遅延課題、5 秒遅延課題、10 秒遅延課題の各々について、後半部切除群では 0.71、0.97、0.95、0.21 であったが、前半部切除群では 0.43、0.47、-0.64、-0.13 であった。すなわち、前半部切除猿は遅延条件がないか、またはきわめて短い課題では再学習遅滞を殆ど示さないが、遅延時間条件を明確に設定した課題では顕著な障害を示した。

¹⁾ 本研究の内容は、第 17 回日本神経学会、第 46 回日本薬理学会近畿部会で発表の予定である。

²⁾ 井深允子・久保田競(以上、霊長研)との共同研究。